

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程3年 横田 悠矢

今回の派遣プログラムは、ストラスブール大学・ハイデルベルク大学の院生および教員との議論や交流を通じて、研修テーマである「ジェンダーと性的マイノリティ」が提起する問題の諸相や、また学生・研究生活一般について意見交換を行うことのできる貴重な機会であった。

両大学で行われたワークショップでは、中国社会における家族制度、性的マイノリティとアイデンティティ、日本語やフランス語に見られる男性性、入学試験と女性差別、ノルウェーにおけるホモ・ナショナリズム、日本における性教育と女性性の歴史、香港における女性の社会運動など多岐にわたる主題が扱われ、文化越境的な視点からさかんな議論が行われた。とりわけ、世界的に見た日本のジェンダー平等の低い水準をいかに改善するか、いかに男性性・女性性という二分法の裏をかくか、といった点が議論となり、現代社会において政治・文化・社会的に重要な位置を占めるジェンダーについて、あらためて考察する契機となった。

加えて、ストラスブールでは、ロアン宮内の考古学博物館・装飾博物館・美術館やルーブル・ノートルダム美術館、近現代美術館、欧州議会 Parlement européen、ホスピス地下のワインカーヴなど数多くの施設を見学し、アルザス地方の歴史や文化についての理解を深めることができた。またハイデルベルクでは、京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィスを訪れ、オフィスの活動内容や大学間交流に関する説明を聞くことができたほか、ハイデルベルク城とその周辺、旧市街、大学図書館、学生街、哲学の道などを見学し、学生・研究生活をとりまく街の様子を詳しく知ることができたことも、今回の派遣の成果に挙げられる。

例年、本プログラムで一週間の研修を通して留学を前向きに検討するようになった、という声が少ないが、今回の参加者には「京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻」を通じたジョイント・ディグリー制度の利用者がいたほか、将来的な留学をすでに視野に入れている学部生が多かったのがとくに印象的だった。またハイデルベルクでは、一昨年前に本プログラムに参加し、現在はハイデルベルク大学に留学している数名が加わったことで、現地での生活について具体的に聞くことができ、交流がいつそう有意義なものとなった。今後も京都大学・大学院から多くの学生や院生が、大学間交流に積極的に貢献することが強く望まれる。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科博士課程1年 山下大輔

2020年2月20日から28日にかけて、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学派遣研修プログラムが実施された。この研修は文学研究科の京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻（修士課程）の連携先であるハイデルベルク大学を含む上述の2つの大学を学部生が訪れ、ワークショップに参加するというものである。参加者は日程の前半にストラスブールで、後半にハイデルベルグにて研修をおこなった。そのうち21日と25日が現地の大学生たちとのワークショップにあてられていた。またその他の日程の中には市内の文化施設やEU機関の見学が含まれていた。以下、本プログラムの中心行事でもある、2大学でのワークショップについて報告する。

今年度のワークショップのテーマは「ジェンダーと性的マイノリティを文化越境的な視点から考察する」というものであった。このテーマに含まれる「ジェンダー」、「性的マイノリティ」、「文化越境」という三つの概念自体、それぞれ個別に様々な文脈から議論されるものである。それを反映して日独仏の学生たちによるプレゼンテーションも実に多様な切り口からおこなわれた。それはたとえば、現代社会における性差別や性教育の問題、そして女性教育の歴史という観点である。性教育についてのプレゼンテーションにおいては、学校における性教育の現場に助産師が加わるという具体的な成功例が紹介され非常に興味深かった。また女性教育についての発表では、日本では女性の教育環境の改善が必ずしも「女性の解放」に寄与してこなかったと指摘された。その原因について発表者たちは、この教育環境の改善がそもそも日本の経済的発展のための政策に過ぎなかったのだと論じ、そのようなモチベーションにおいて「性の平等」が目指されることの問題性を明らかにしていた。これは現代にも通じる根深い問題である。非常に啓発的な発表であったといえるだろう。また、性的マイノリティをめぐる制度問題について論じたグループからは、同性婚を取り巻く現代の状況が論じられた。そこで発表者たちは渋谷区のパートナーシップ証明書制度の利点と問題点を提示し、そのうえで日本の伝統的な家族観についても問題提起をおこなっていた。具体的な事例の分析を通して普遍的な問題へ迫ろうとする意欲的な内容であった。これらはいずれも京都大学の学生によりおこなわれた発表である。ストラスブール大学、ハイデルベルク大学の学生たちによる発表もまた極めて多彩なものだった。たとえば日本語表現に見られる性差別意識や SF-ポルノ映画における性表象の紹介という、言語的・文化的な発表が行われる一方で、セクシュアリティとナショナリズム、宗教の関係や、香港の「逃亡犯条例」に反対するデモとその際に起きた暴動といった政治的な問題もとりあげられた。

2日間のワークショップでおこなわれたいずれの発表においても、発表者たちが自身の知的関心に基づき積極的にテーマに取り組む姿が印象的であった。触れたように大きなテーマが設定されているからこそ、参加者が自らの探求すべき問題を自由に設定し、それに全力で向き合うことが可能となっているのだろう。そして、その成果を海外の大学で発表するという事は非常に貴重な経験である。今回の参加者の中には、研修を通して留学を積極的に考えるようになった学生がいた一方で、研修に参加する時点ですでに数か月後に留学することが決定している者もまた多くみられた。海外の大学生活について知り、自身の留学生生活をイメージするためのいいきっかけになったのではないだろうか。短期間で集中的に学び海外経験をすることができる本プログラムは、将来的な長期的な文化越境の準備としてもきわめて有効な機会といえるだろう。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科1年 濱 希望

今年の研修では「ジェンダーとセクシュアルマイノリティー」をテーマに、ストラスブール大学・ハイデルベルク大学で発表が行われた。ここ数年、日本を含めた各国で男女格差などのジェンダー問題、セクシュアルマイノリティーのアイデンティティや差別の問題といった議論が盛んにおこなわれているなかでのこのワークショップはとても興味深いものだった。それぞれの発表のトピックとしては「日本の学校における性教育」「日本語の中に現れる男女性」「香港プロテストにおける少女像」など多岐にわたり、また社会学、言語学、メディア学などそれぞれさまざまなアプローチがとられており面白い発表だった。ただ一つ気を付けなければいけないと思ったのが、日本ではこうだが、ドイツではフランスではどうか、というような議論の進め方だ。このような議論の進め方は国際的な場で自国のことを紹介するときに自分自身も使ってしまうがちな方法だが、国という単位で画一的に語ってしまうことはともすればステレオタイプ化にもつながってしまい問題に対する視野を狭めてしまう危険性がある。同じことが今回のトピック「ジェンダーとセクシュアルマイノリティー」についても言え、男女という分け方それ自体に挑戦する視点も必要なのではないかと思った。例えば、複数の国の事例を扱いながらも国家という枠組みそれ自体を疑問に付し多角的なものを見方を心掛けるということは、文化越境専攻で学んでいる自分自身のこれからの課題でもある。

本研修で発表の気づき以外に私にとって刺激的だったのは人との出会いである。ストラスブール大学やハイデルベルク大学の学生との出会いはもちろんであるが、京都大学からの参加者との交流からも学ぶものがたくさんあった。本研修にはカム先生をはじめ三人の引率の方と八人の学生が参加しておられた。多くの参加者が学部2、3年生であったがみな国際経験が豊富で発表においても堂々としていた。彼らから大学でさまざまな活動に打ち込んでいたり、留学を控えていたりという話を聞くことはとても面白く、研究のことや自分の将来についてより深く考えることのきっかけとなった。わたし自身二年前にも本研修に参加しておりハイデルベルク大学に留学するきっかけとなったのは間違いなくこの研修であるので、私自身の話や経験も同じように良い影響となっていることを願う。

最後に本研修を支えてくださった各大学の先生方、国際交流推進室のみなさまにお礼を申し上げる。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科修士一年 (楊子江)

Heidelberg University and Kyoto University hosted the second workshop on gender sexual minorities issue in Germany on Feb. 25th, 2020. The whole workshop lasted for more than seven hours, including nine presentations in three panels.

Panel 1 was related to media. The first presentation was given by Sara, under the topic of "Shu Lea Cheang's cybersexualities as queer pornotopia". Her analysis on the art pieces (such as two science fiction films: "I.K.U." and "FLUIDØ") of Shu Lea Cheang, a famous LGBTQ activism, mainly focus on the relationship between body politics and cyberspace in the post-capitalist future. As she claimed, Shu Lea Cheang is a digital drifter trying to free the body from the conventional narratives of gender, sexual orientation, and race by reversing people's imaginations. Although she blurred boundaries between the male and female binary, however, neither non-sexual bodies nor disabled bodies were mentioned. The second presentation was on sex education and the new tendency in nowadays Japan. The importance of sex education was discussed at first. The presenters did not attempt to conceal their critiques on the deficient top-down reformation implemented by the government. For example, the "conservative" body figures in teaching material. This circumstance also resulted in the problematic practices in the classroom, such as the Nanao case in 2003. However, on the other hand, the bottom-down initiatives, such as Akita prefecture as a model case, the establishment of N.P.O.s, and activists active on social media also indicated the potential of civil society. What is more, the presenters emphasized the necessity of sex education for parents. The last presentation was on the comparison between Judith Butler and Roland Barthes. Such as figure of minorities vs figure of other, social and political questions vs moral and aesthetic and so on. Through the comparison, the previously overlooked transcultural aspect -the meaning of "Neutral" (suspension of the meaning)-was brought up.

Panel 2 was related to identity. The first presentation was on the constructing of womanhood throughout Japanese history. It is believed that the vast gender gap in nowadays Japan was originated from the idea of Kegare (unclean) and discrimination on education. The presenters also claimed that the out of date political and economic system does not fit in the current Japanese society and education any longer. Even though Japanese society became much more open than before, as the movie of Sheri-chan shows, more countermeasures are pivotal in realizing the potential of the Japanese woman. The second presentation is on the cooling-off period for would-be divorcee in China. The necessary information on the legislative process and the public debate on this civil code draft were mentioned at the beginning. Then, in order to answer the question that why the vast gap existed between social policy and public opinion, detailed background information on demographic changes, family system, welfare regime and the hot topics on social media was introduced. In the third part of the presentation, previous researches on the reasons behind the increase in divorce rate and the tendency found in western families are referred to predict the possible change of family system in China. The last presentation is on alienation and compelled invisibility of queer Muslims in Norway. To understand their circumstances, the presenter also researched through semi-structured interviews and analyzed the media discourse. She found that salam provides a space of belonging and possibility beyond alienation, where queer Muslims may exist, where queer Muslims may be visible, where the visibility can be leveraged.

Panel 3 gave us some concrete cases on the gender topic. For instance, the first presentation is on the gender gap discrimination in the university entrance exam at Tokyo Medical University. To solve the problem, one must notice that the unbalance did not exist only in the education sphere, but more importantly, in the male-dominated working condition (in this case, is the doctor position). The achievement of the work-life balance depends on the labour division not only within, but also without the domestic sphere. At last, suggestions are given based on German practices. The second presentation was on the fixed and mixed images of the family in modern Japan. Without surprise, popular T.V. programs/Anime tend to represent the most famous image of the traditional family model. However, beyond the media, people do practice families in various ways. For those "uncommon" families or sexual minorities, the law-system and the adoption policy are introduced but far from perfect—finally, the very last presentation on the female expression in the social movement. More specifically, the female body in Hongkong movement.

After all the presentations, a general discussion took place among all the participants. All of us exchanged our idea on the social construction of gender and sex. Book recommendations also are given by the host.

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2年 白井愛美

主にハイデルベルク大学文化越境専攻の学生と共同のワークショップについて報告する。

## プログラム内容・学習成果

今年のワークショップはジェンダーとセクシュアルマイノリティーで、事前の勉強会では伊藤公雄先生に来ていただき主に日本のジェンダーギャップやセクシュアルマイノリティーについての話をしていただいた。ワークショップの発表に向けてはそれぞれの学生がジェンダーに関する文献を読み、その中で興味のあるトピックを探した。私のグループは日本の性教育の問題点について調べ、学校での性教育に影響を与える政治とジェンダー平等やセクシュアルマイノリティーに対する権利がどうかかわるか、そして学校現場以外ではどのような啓発活動が行われているのかを調べた。京都大学からの他のグループは日本の女性性の歴史、同性カップルをめぐる日本の制度や法律についての発表をした。また、引率をしてくださった横田さんはフランスの思想家とジュディスバトラーの関係についての発表をされた。ハイデルベルク大学文化越境専攻の修士課程の学生からは、台湾のアーティスト Shu Lea Cheang のSF ポルノと呼ばれるような作品のなかのクィアの描写、ノルウェーでのムスリムかつ異性愛者のコミュニティ調査、中国の家族形態と離婚、日本の医学部入試の女性差別問題、香港の社会運動での女性のイメージなどの発表があり、様々な地域の多様なトピックを学ぶことができ非常に興味深かった。ハイデルベルク大学でのワークショップの特徴は、各発表の後に、様々な視点から鋭い質問が活発になされたことだ。これは普段から文化越境的な視点で考える訓練を積んでいる学生ならではだと思った。また、様々な国のニュースに注意を払っている学生も多いと感じた。

## 海外での経験・進路への影響

プログラム終了後から1年間ハイデルベルク大学の文化越境専攻に留学予定であったので進路への影響については、とくに変わったことはない。しかし、ハイデルベルク大学の学生は学部で専攻した分野を土台としてしっかり勉強した後に文化越境専攻に進学しているため、自らの土台の弱さを再認識し、勉強への意欲が高まった。また、この研修を通してこれから一緒に勉強することになる他の学生と出会い話すことで、留学先での授業への期待も高まった。ワークショップの間の昼食で他の学生と話した際、文化越境専攻はドイツだけではなく様々な国の留学生で構成されておりそのうえコース言語も英語であるため、ドイツ語をほとんど話さない学生も多かった。しかし私の留学中の目標の一つにはドイツ語能力の向上もあるため、授業外で自主的かつ積極的にドイツ語を勉強する必要があると感じた。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 末田泉名

## ①学習成果

今回のハイデルベルグ・ストラスブール派遣以前は、ジェンダー・性的マイノリティの問題は世界的にも重要なテーマであるという認識はあるものの、身近な経験にも基づいた極めて一面的な関心にとどまっており、また問題の性質上なかなか他者と意見交換をするという機会がなかった。しかし特にストラスブール大学でのプレゼンテーションを通じて、それが極めて多様な側面を持っており、また多様な面から考える必要のあることだということがわかった。特に印象深かったのが、京都大学のプレゼンで、血の穢れの歴史的背景と女性差別との結び付き、現在の生理に対する社会的な態度の変化を取り扱ったものと、ストラスブール大学のプレゼンで、言語的側面から見た日本語・フランス語の男性優位・女性軽視（蔑視）についてである。前者に関しては、日本では生理について表立って言うのははばかられたり男性が生理用品を扱うことに抵抗があったりなどと言う場合があるが、それがどのような歴史的背景を経て形成されてきたと考えられるかがわかった他、フランスでは前述したような抵抗がなく、隠されることでもないという意見を聞くこともできた。また後者に関しては、外国人として日本語を学習している人間だからこそ気がつく日本語に内在する女性軽視に気がつくことができた。同時にそれらの言葉が既に私たちの感覚や生活に深く結びついており、今となっては何か別の言葉で代替するのは難しいのではないかという考えも持った。それらにどこまで自覚的になり、また変更を加えるかについては必ずしも「この言葉は実は差別的要素を含んでいるから使うのをやめよう」と単純にいかないのだと思わされた。

## ②海外での経験

EU機関の見学により、普段知ることのあまりない欧州の法律や政治がどのように運営されているかを学ぶことができた。非常に有意義な経験で、ヨーロッパが第二次世界大戦後どのように民主主義的な体制や平和を維持してきたか、ブレグジットがどれほど衝撃的な出来事だったかを知ることができた。

## ③プログラム内容

現地大学でのワークショップ以外にも現地での諸機関、博物館などの見学によりヨーロッパの過去から現在に至るまでの歴史などを学ぶことができ、大変有意義だった。

## ④進路への影響

京都大学卒業後は院に進学したいと思っており、兼ねてから選択肢の一つに入れていた海外の大学院への進学を真剣に考えるきっかけになった。実際にハイデルベルグ大・京都大のトランス・クレジットに在籍している方の話なども聞くことができ、自分がこれからどのように研究を進めていくのか具体的に考えることができた他、大学院留学をする上でどのような手段があるのかについても情報収集をすることができた。

局で編集いたします。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2年 久坂明日香

この一週間は私にとって大変実り多いものでした。参加者のうち4人が留学を決めており、現地では海外経験豊富な学生に囲まれ、留学や将来を考えるにあたって非常によい環境でした。私は日本史専攻ですが、その枠の中にいるとどうしても「留学」が遠いものに思えてしまって、いつかしたいと思いつの間にか二回生の終わりまで来てしまったのです。その状況を打開して今一度自分を見つめなおしたくこの研修に応募したのですが、それは十分に達成されたと考えています。

二日目に行われたストラスブール大学との交流会は新鮮な体験でした。ディスカッションの中で特に印象に残ったことは、まずフランスと日本の大学制度の違いです。格差是正の観点から個々の大学に試験を設けず、それゆえにいわゆる大学ランクが存在しないこと、資格に上下をつけないこと。今の日本・中国・韓国の様子とは正反対で、これが正に機会の平等であると思われました。

休憩時間の交流ではストラスブール大学で日本史を勉強している修士課程の学生と深い話ことができました。彼女は江戸時代の対馬を研究しているとのことですが、私もその時代の外交史には興味があったので話が弾みました。フランスで日本近世史を研究するなら、長崎でのポルトガル・スペイン・オランダとの交流に意識が向きやすいのではないかと、対馬がヨーロッパとは最もつながりが薄いのではないかと思ひ、彼女になぜ対馬を選んだの？と聞くと、ヨーロッパでは長崎・琉球・蝦夷地は研究が進んでいることと、今は仲が悪い日韓がなぜ江戸時代に友好関係を築いていたか知りたかったから、と。それは日韓の研究者によって多くの研究がなされてきた分野ですが、彼女は勉強を通して、当時の日韓関係は表面的な友好であることを理解したと言っていたので、やはり歴史を学ぶことは国際理解のためにも大切だと嬉しく思いました。海外で日本史研究・教育がどう進められているか全く知らなかったのも、漢文や韓国語は読むんですかとたずねたところ、韓国語は頑張っているけれど漢文は全然読んでいないと言っていたので、やはり海外で成果を出す人は多大な努力を積んできたのだと背筋が伸びる思いでした。

交流のなかで、フランスについてどう思う？と最初に聞かれたものの、着いて電車に乗っただけで何も分からないからたばこの吸い殻が多いイメージしかないよと答えました。そしたら彼女は、デモは日本ではどう思われているの？と。正直デモのニュースをみても特に何も思ったことがなくて、ただ観光客は大変だろうなと思うだけでした。それを正直に伝えたところ残念そうにしている。それを見て、ニュースの画面越しであっても、その裏にいる人のことを考えなければならないなと反省しました。

将来は長期留学も留年もせず修士課程を出て学芸員の仕事を地道に探すのが一番「賢い」「身の丈に合った」選択だとずっと思っていました。大学に入って、研究職を目指す周りのレベルの高さとストイックさに衝撃を受け、文系学問・大学教育を軽視する日本のアカデミズムの将来にも限界を感じて、とくつつもの理由をつけて研究者への道を自ら閉ざしました。でも本当にそれで後悔しないのか、研究者になりたくて京都大学に来たのではないかという考えが頭の隅に居座り続けました。

けれど、今回留学・研究している大学院生と深く関わる機会を得られたことで、大学を最短年数で出て就職するという考えが非常に狭いものであったと感じさせられました。就職や学費・生活費の問題など将来への不安は強く残ったままですが、それでも学問と長く携わっていきたいと思わせてくれました。

最後に、このプログラムでは本当に人に恵まれたと思っています。いつも私たちを和ませてくれた頼もしいカム先生、相談に乗ってくださった現地の先輩方、留学の情報を提供してくれた京大欧州拠点のお二方、そして多くの刺激を与えてくれた参加者の皆さん、ありがとうございました。



## 「食文化と味覚の文化越境」

京都大学文学部3年 佐々木伸康

フランスのストラスブール、ドイツのハイデルベルク両都市に滞在する貴重な機会を得、「ジェンダーと性的マイノリティーを文化越境的な視点から考察する」というテーマでの現地学生とのワークショップ、EU機関や史跡、博物館の見学等を行った。境遇を異にする多くの学生との交流や教科書の中の出来事に過ぎないとさえ感じていた欧州の文化に実際に触れたことを通じ、日本での学習意欲ならびにさらに海外で学習を深めたいという希望が一層明確になったことを実感している。

さて、文化は現地学生との交流や見学からのみ感じられるわけではない。「食」は生命活動を維持する為に不可欠でありながらその土地の文化を取り込んで形成される、いわば文化の鏡ともいえるべき存在である。私たちは基本的に昼食と夕食は現地のレストランでとったが、日本で食べる食事との異質さを楽しみ、時に戸惑うこともあった。私からは滞在中に出会った食文化についていくつか紹介したい。

ストラスブールでもハイデルベルクでも、キャベツを塩に漬けて発酵させて作る漬物（フランス語ではシュークルート、ドイツ語ではザワークラフトと呼ばれる）に出会った。別の国にもかかわらず同じ食べ物を共有していることは、ストラスブールをはじめとするアルザス地方は歴史的に独仏の係争地であったことを想起させる。漬物という観点では、保存などのため食べ物を漬けるということは日本を含めて普遍的な発想であることがわかる。私は6回レストランで夕食をとったうち4回このキャベツの漬物を食べたが、店ごとに酸味と甘みのバランスや味付けが異なり興味深かった。派遣中にキャベツ2玉分ほど食べたと思われる。

また、ストラスブールではチュニジアなどのマグリブ料理店やベトナム料理店など、旧フランス植民地国の料理店を多数見かけた。各国が独立した現在においても植民地時代の影響は根強く残っていると考えられる。ハイデルベルクではドネルケバブがごく一般的な食事として親しまれていた。ドネルケバブはパンに切り落とした肉や野菜を挟んだものがポピュラーだが、トルコ系移民から持ち込まれて広く普及したと言われている。EUでは移民に関する議論がしばしば行われ日本の報道でも目にする機会が多いが、こうした問題を身近に感じる機会となった。

加えて、ストラスブール・ハイデルベルク両都市において酒類が非常に生活に根付いていた。歴史的には、ストラスブールで見学した約14世紀から歴史があるワイン貯蔵庫は病院の中にあり、かつて患者は病院の診療費をワインで支払うこともあったという。また、ハイデルベルクで見学したハイデルベルク城には20万リットル以上が貯蔵されていたという巨大なワイン樽があった。現在でも酒類は生活の一部となっており、街中にはワインやビールを販売する屋台が出ていたり、地元の醸造所が複数あったりした。「水の代わりに酒を飲む」と噂として聞いていたが、それにもうなずけるほどこれらの地域の人々にとって酒は身近な存在であることがわかり、日本における酒類への一般的な考えとの違いを感じた。ドイツではビールが飲めない人にとって定番とされるりんごの飲み物があると聞いたのも印象的だった。

最後に、日本で食べるものとほとんど変わらない食事もあったことを付け加えたい。ホテルで食べた朝食である。パンやサラダ、ヨーグルトなどを毎日食べていたが、いつも通りの味だ、と思っていた。日本から1万Km以上離れた場所でも普段と同じ味がするのは当たり前のように、とても不思議な感覚である。世界中で均質な味覚を部分的にでも共有していることは良いことなのか悪いことなのか一概に言うことはできないが、自分が思っている以上にヨーロッパは「近い」存在なのだろう。

外国に住むことは、その国の文化を一旦丸ごと受容し、その後で価値判断を行うというプロセスである。日本

で外国語を勉強したり外国の料理を食べたりすることはできても、その国における文脈の中で受容することは完全にはできないと思う。本派遣のフランス・ドイツ滞在によって自分の価値観や経験と違うことも共通していることも数多く感じる事ができ、ヨーロッパがさらに身近に感じられるようになったが、真にヨーロッパを理解するためにはそこに住むことが欠かせないのではないか。今後、長期の留学を十分に検討したい。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科 学部2年 花房朋樹

本プログラムの前半で訪れたストラスブールは、私にとって始めて訪問したヨーロッパの街だった。この辺り一帯アルザス地方は、何度もフランスとドイツが取り合った地域で、ヨーロッパの歴史における重要な場所の1つであるため、至るところで歴史を感じる事ができた。

まず最初に驚くのは、電車に乗っているだけで、国境を越え、ストラスブールに入れるということである。電車に乗る前と降りた後で、周りから聞こえて来る言語が変わってしまうのだ。まだ会話できる段階には達していないが、ほんの少しドイツ語を勉強していたので、発音や響きの特徴から違う国に入ったことが良く分かった。話には何度も聞いたことがあったが、実際経験してみると、ずっと島国で生活してきた自分には、どうも落ち着かないことだった。また、ストラスブール市内には、ドイツ語の面影を感じさせる地名が複数残されていたり、高校の世界史でドイツ人の発明家として紹介されたグーテンベルクの石碑があるなど、今はフランスという国の領土だが、これまで異文化との交流（異文化の侵入ということもできるが）が盛んだったことを表していた。

研修2日目にはEU議会を見学した。議会がこの土地に置かれたと言うのも、フランスとドイツが何度も争った場所を選ぶことで、ヨーロッパ平和の象徴にしたいとの願いが込められているそうだ。Democracy や peace と言った言葉が度々強調され、第一次・第二次大戦に代表される度重なる戦争への反省と、平和を実現するのだというヨーロッパの本気が感じられた。一方で悲惨な歴史の名残もあった。議会の屋上から見えるダムは、敵が街中まで侵入してきたときに、住民もろとも街全体を水没させられるように設計されているとのことで、かつての緊張感を今に伝えていた。過去の対戦でもしこの街が水没させられていたら、今のストラスブールはないのかと思うと、戦争の底知れぬ恐ろしさを感じずにはいられなかった。この日はそんな負の歴史も易しく包み込むような暖かな陽気で、この地から世界に平和が広がって欲しいと心から思った。

その日の午後には、教会を訪問し、塔にも登ることができた。この塔はこの辺りでは一番高い建物で、ストラスブールのシンボルであり、人々にとっての目印である。この塔の建築が始まったのは14世紀のことであり、今ほど機械化が進んでいなかった中世に、これだけの塔を作り上げたのかと思うと、当時の人々の信仰の深さが感じられた。翌日の夕刻には、偶然その近くを歩いており、幸運にも教会の鐘の音を間近で聞くことができた。15分以上も鳴り続ける壮大な金の音は、正に圧巻で、町中に響き渡るといふ感じであった。現代のようにトラムや自動車の音など、人工的な音がなかった時代には、この鐘の音は人々に崇められ、人々の心のよりどころとなっていたことだろう。

ここで余談だが、私は視覚障害当事者で、何をやるにしてもバリアフリーについて意識を向けながら過ごしていた。市内に張り巡らされたトラムという路面電車は、ホームと電車の境が分からないほど段差も隙間もなく、市民の足であるトラムが、だれにとっても利用しやすいように作られていることは、素晴らしいと感じた。また白杖を持っていると、明らかに外国人である私にも声をかけてくれる人が多く、単純にうれしかったし、障害に対する理解も進んでいるように思えた。一方、段差や横断歩道のところの点字ブロックの整備はまだ不十分だった。日本とフランスではまた違った課題があり、それぞれの良いところを取り入れていくことで、だれにとっても住みやすい街になって欲しいと思った。

私はこれから西洋史学専修に進み、自分の専門を深めていく時期にきている。このタイミングでヨーロッパの2カ国、とりわけ複雑な歴史をもつ国境近くの2都市を訪問できたことは、貴重な経験になった。まだ自分の研究テーマさえ曖昧な段階だが、今回の経験でモチベーションを上げることができた。

<事務局使用欄> 受付番号 :

-

最後にこのプログラムに関わってくださった、カム先生、引率の山下さん・横田さん、ハイデルベルク・ストラスブール大学の方々、国際交流推進室の野沢さん、そして参加者のみんなに感謝申し上げたいと思う。本当にありがとうございました。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 福原彩女

今回の研修は、おおまかに、ハイデルベルク大学とストラスブール大学でのワークショップ・学生間交流と、フランスとドイツの市中に繰り出しての歴史・文化体験という二部構成になっていた。私にとって初めてのヨーロッパ滞在だったこともあり、どちらの部も新しく知ることや初めて見るものだらけで新鮮だったが、この報告書ではワークショップとハイデルベルクでの市内見学に焦点を絞って報告していきたい。

ワークショップでは、ストラスブール大学では日本学科の大学院生と日本語で、ハイデルベルク大学では京大とジョイントディグリー協定もある文化越境専攻の修士課程の学生と英語でプレゼンテーションとディスカッションを行った。毎年プレゼンテーションに異なるテーマが設定されるこの派遣プログラムだが、今年度のテーマは「ジェンダーと性的マイノリティを文化越境的な視点から考察する」であった。私は社会学を専攻しており、まさにジェンダーやセクシュアリティについて学びたいと考えていたため、このテーマには特に強く関心があった。そして、ワークショップを通してこのテーマの範囲の広さと奥深さを再認識するとともに、他学生の新鮮な研究テーマを知って自分の視野が狭かったことに気づいた。ジェンダーやセクシュアリティについて考えるとき、私はどうしても日本の社会での女性性の構築や同性婚問題、男女平等などを思い浮かべてしまいがちだったが、ストラスブール大学やハイデルベルク大学の学生の関心はもう少し範囲が広く、学問の分類に縛られず自由であった。例えば、ストラスブール大学では、言語学的な観点からジェンダーを考えた発表をする学生が多く、漢字を分解して部首ごとに分類することで日本の歴史的な男性性や女性性を考察したり、人称表現の変化や呼称から日本のジェンダー観、ひいては国民性を考察したりする発表があった。フランス語との比較もなされていて、フランス語の歴史や隠れたジェンダー差別も学ぶことができた。ハイデルベルク大学では社会学的なテーマも多かったが、白熱している香港の社会運動での女性の役割や表象のされ方をメディアに注目して考察していたり、ノルウェーでのムスリム兼セクシュアルマイノリティである人々とそのサポート機関を調査していたりと、研究対象が学際的かつ文化越境的で大変興味深かった。自分の関心分野についてヨーロッパ圏の大学院生の発表を聞けるこのような機会は大変貴重であり、素晴らしい刺激を受けることができた。この有難い経験を活かして、今後視野を狭めないよう意識して学びを深めていきたい。また、ワークショップでのよかった点に、フランスやドイツの社会に生きている人の生の声が聞けたということがある。ジェンダーやセクシュアリティについての話題では、どうしても社会的にタブー視されていることが関わってくるため、面と向かってでないとも正確に聞けない、知れないことが結構あるのである。例えば、生理用品は日本では透明な袋に入れることは避けられており、他に買うものがあれば別の袋に入れられたりするが、フランスやドイツでは当たり前のように透明な袋に入れられ、食料品や他の日用品と全く同じように扱われるとのことだった。税金も低いし、男性が買っても違和感を持たれない。実際、市中のスーパーマーケットでも当たり前のように扱われていた。ワークショップのディスカッションや昼食中に学生や教授と直接話したり、実際に自分の目で観察したりすることを通して、少しではあるが、自分が属していない社会やそこに漂う雰囲気を垣間見ることができたように思う。日本にはなかなかできない経験ができ、非常に満足している。

ハイデルベルクの市内見学では、中世の雰囲気をそのままに残す美しい石畳の街を歩いてハイデルベルク城を訪ねた。12世紀にもう既に建てられていたという長い歴史を誇る城の壁や塔は、所々大きく崩れており、フランスとの戦争の激しさを表していた。どことなく柔和な雰囲気のある日本の木造の古い建物とは全く異なる圧倒的な質量と存在感に、ドイツと日本の文化と歴史、風土の違いを改めて感じた。そんなハイデルベルク城の中に

はなんと直径3mほどの巨大なワイン樽がある。ハイデルベルク候に貨幣で貢納できない貧しい農民や民は、ワインで税を納めていたために、城内にワイン樽がおかれていたそうだ。私たちが訪ねたストラスブールの有名なワインセラーも元は病院で、同じく貧しい人々が治療の対価をワインで支払ったために巨大なワイン樽が沢山置かれることになり、ワインセラーになったらしかった。ワインが対価になっていた頃のヨーロッパの衛生環境は劣悪で、水を飲めば感染症に罹ってしまう状況だったため、身近にとれる作物から作れるワインやビールが主な水分摂取方法であった。ワインやビールが現在のフランスやドイツの文化に深く根付いている理由を実感できた。茶を淹れる文化の日本や中国との対比もできて、興味深い。また、京大の欧州拠点があるハイデルベルク大学の学生牢も訪ねた。悪さをしたハイデルベルク大学の学生を、警察に引き渡すのではなく大学側が直接処罰するための牢屋で、大学自治の象徴であるが、中の壁一面に描かれた落書きの内容は意外と楽しいものだった。始めは絵に驚くのだが、書いてある内容が分かれば、自由な学生生活を楽しんでいる様子がありありと伝わってきた、京大の欧州拠点があるのも頷けると思った。

このストラスブール、ハイデルベルクでの研修では、本当に素晴らしい貴重な体験をさせてもらった。滞在期間は短かったが、様々なことを直に経験できた。私はこれから北欧へ留学するので、文化や社会、歴史を西欧とも比較できればと思う。この経験をこれから様々な場面で活かしていきたい。

\*

ウイルスの影響もあり、今回の研修実施にかなりご苦労があったのではと思います。カム先生はじめ、この研修に関わってくださったすべての方に深く感謝いたします。素晴らしい体験をさせていただき、本当にありがとうございました。